

大学生のライフコースに関する日韓比較調査報告

—教育・学歴、結婚・パートナー関係を中心に—

山根真理*・沈知儒**・加藤奈那子※・鈴木萌加**※・渡邊奏子†・洪上旭††

1. はじめに

本稿は、2016年に日本と韓国の地方都市圏で大学生を対象に実施した質問紙調査の基礎集計報告である。¹⁾ 若者のライフコースを比較社会的に考えたとき、日本と韓国には多くの共通性がある。近代家族論の観点によるアジア、ヨーロッパの家族変動比較論（落合、2013）によると、日本と韓国はヨーロッパ諸社会と比較して変化のスピードが速い点で、圧縮的近代（韓国）（Chang,2010）、半圧縮的近代（日本）の変動を経験した社会として位置づけられる。落合の家族変動比較論は人口転換とジェンダーに注目し、ヨーロッパ地域では第1次人口転換の時期に「主婦化」が生じ（第一の近代）、第2次人口転換の時期に個人化、家族多様化と並行して「脱主婦化」が生じ（第二の近代）、並行して高齢社会に対応した社会システム構築の試みがなされてきたが、短期間で近代化の道をたどったアジア諸社会では高齢社会に対応した社会システム構築は不徹底で、「家族主義的個人化」とみなしうる現象が生起している、とする。晩婚化、低出生率、婚外子出生率の低さ、女性労働力率の相対的低さなど、日本と韓国に共通して起こっている諸現象は、（半）圧縮的近代化を経験してきた社会の共通現象とみなすことができよう。

この比較家族変動論の議論を子ども・若者のライフコースに引き寄せて考えると、「第一の近代」の経験として「家族のなかで少ない子ども」としての成長、長期化した教育期間、母子関係の強さ、ジェンダー化された社会化過程などの諸現象、「第二の近代」の経験として「社会のなかで少ない子ども」としての成長、父親の子育てへの関与、社会化過程の脱ジェンダー化、晩婚化・非婚化、パートナー形成の多様化などの諸現象が考えられる。婚姻規範が強く、第2次人口転換に応じた社会システムが未整備で、不安定な雇用状況下にあって学卒・就職・家族形成という「大人への移行」の困難という共通性をもつ日本と韓国において、教育、仕事、パートナー関係、家族形成などについて、若者世代はどのような意識をもち、どのように対処しているのだろうか。本稿は共同調査のなかの教育・学歴、結婚・パートナー関係に関する内容についての基礎集計結果であるが、上記の問いに対して示唆を得ることを意識して、集計結果の読み取りを行う。

2. 調査概要

本調査報告のもとになる調査は、2016年11月から12月にかけて、日本では愛知県および周辺地域、韓国では大邱広域市および周辺地域の大学に通う大学生を対象に実施したものである。調

*愛知教育大学教育学部 **嶺南大学校生活科学大学院生 ※愛知教育大学家庭専攻卒業生
※愛知教育大学家庭選修卒業生 †愛知教育大学家庭選修卒業生 ††嶺南大学校生活科学大学

査は、愛知教育大学教育学部山根研究室と嶺南大学校生活科学大学の洪上旭研究室との共同研究として実施した。山根研究室の4年生（当時）である加藤、鈴木、渡邊、洪研究室の大学院生である沈が調査メンバーとして参加した。調査の実施にあたり SNS を活用して情報交換と議論を行い、質問紙調査の作成、調査実施と分析を行った。（鈴木、2017、渡邊・加藤、2017）質問紙の構成は、①基本属性、②教育・学歴に関する生活実態と意識、③結婚・パートナー関係に関する意識と実態、④結婚と家族に関する意識、⑤「学閥主義認識」、⑥「進路成熟度」からなる。

配布と回収は、愛知圏調査は配布 446 票、回収 393 票（有効回収率 88.1%）、大邱圏調査は配布 450 票、回収 414 票（有効回収率 92.0%）である。計画段階では調査対象者を「日韓の地方都市圏にある大学の3、4年生」と設定した。「3、4年生」としたのは、仕事、パートナー形成などの将来を具体的に考え始める時期という意図からである。愛知圏調査は「愛知県内の4年生大学」に在学する学生を対象に設定し、結果的に19の大学の大学生が回答者となった。18校は愛知県内の大学、1校は岐阜県内の大学である。大邱圏調査は「大邱広域市および周辺地域」に位置する6校の大学生を対象に実施した。5校は大邱広域市内の大学、1校は大邱広域市に隣接する慶山（キョンサン）市内の大学である。

調査対象者の属性を表1に示す。性別は愛知データ、大邱データいずれも女性が約6割である。学年については、愛知データは3、4年生に配布する当初の設定を実現することができ、3、4年生が98.7%となったが、大邱データでは配布の原則を徹底することが難しく、学部1年生から大学院生まで学年の幅が広がっている。年齢（満年齢）は、愛知データは学年にほぼ対応し、20～22歳に集中している。大邱データの年齢は18歳から29歳まで広く分布し、「25歳以上」の人が9.7%いる。韓国の場合、徴兵制があるため兵役を終えて大学入学あるいは学業に戻るパターンが存在すること、他の高等教育機関を修了あるいは一定期間在籍した後に大学に入学するケースが存在することが、年齢の高い学生が一定程度存在する要因として考えられる。父親の職業は愛知データでは「管理・専門技術」が54.7%と過半を占め、職業階層的な偏りがみられる。

表1 調査対象者の属性

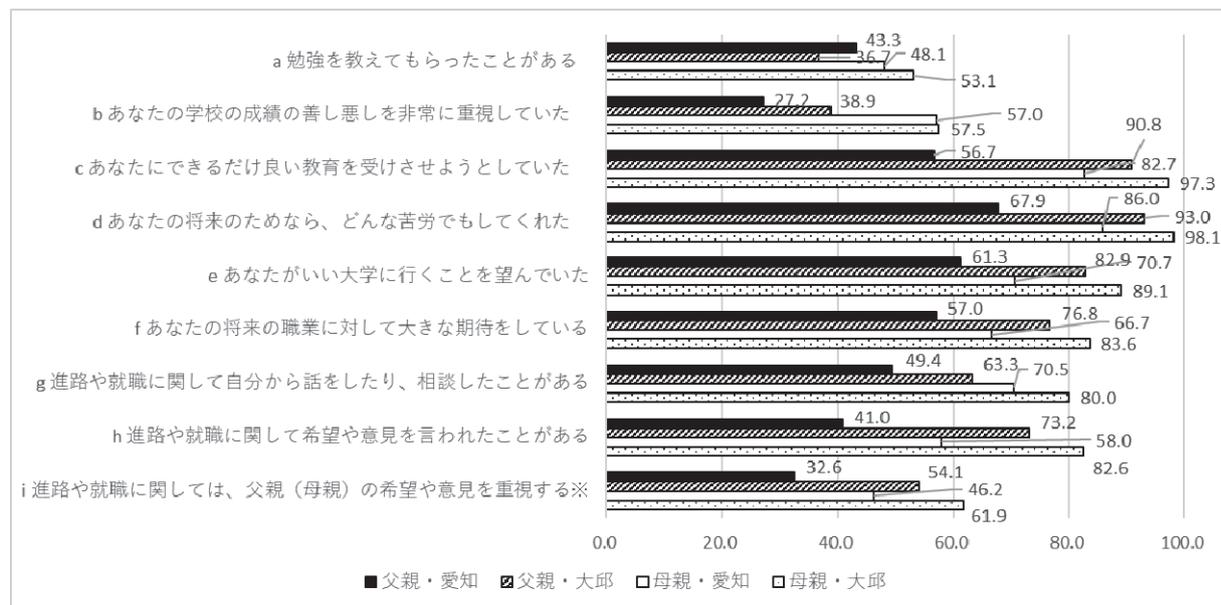
性別		年齢			父職業			母就業形態			
	愛知 (n=393)	大邱 (n=414)		愛知 (n=393)	大邱 (n=414)		愛知 (n=393)	大邱 (n=414)		愛知 (n=393)	大邱 (n=414)
女性	60.8	59.7	18歳	0.0	0.7	管理・専門技術	54.7	21.3	経営者・役員	2.0	12.6
男性	39.2	40.3	19歳	0.0	12.3	事務	2.8	18.6	常雇	24.7	16.9
計	100.0	100.0	20歳	13.0	24.2	販売・サービス	7.9	17.1	パート・アルバイト・派遣等	39.7	10.4
学年			21歳	49.6	17.9	保安	2.5	2.7	自営	3.8	10.4
1年生	0.0	12.6	22歳	32.3	15.5	農林漁業	0.5	2.4	家族従業者	1.3	2.7
2年生	0.0	35.3	23歳	4.1	12.8	製造・輸送・建設等	19.3	26.3	内職	0.0	2.2
3年生	53.9	29.5	24歳	0.5	7.0	その他	4.3	8.7	その他	0.3	7.7
4年生	44.8	13.3	25歳以上	0.3	9.7	無職・専業主夫	1.3	1.4	専業主婦	22.4	36.2
大学院生	1.0	9.4	不明・無回答	0.3	0.0	不明・無回答	6.6	1.4	不明・無回答	5.9	1.0
不明・無回答	0.3	0.0	計	100.0	100.0	計	100.0	100.0	計	100.0	100.0
計	100.0	100.0									

3. 教育・学歴に関わる意識と実態

調査結果のうち、まず教育・学歴に関わる意識と実態について報告する。

3.1 親からの教育期待

図2は父親、母親からの教育期待にかかわる質問項目に肯定的に回答した割合（「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合わせた値）を、地域別に示したものである。



注) ※印をつけた項目 i は項目 h に「まああてはまる」「とてもあてはまる」と回答した人についての値である。

項目 i の回答者数は以下の通り。(愛知父親:n=175 大邱父親:n=305 愛知母親:n=234 大邱母親:n=344)

図1 親からの教育期待(愛知:n=393 大邱:n=414 (項目 i 以外))

総じて父親、母親からの教育期待は高く、「将来のためなら、どんな苦勞でもしてくれた」（父親・愛知 67.9%、父親・大邱 93.0%、母親・愛知 86.0%、母親・大邱 98.1%）「できるだけ高い教育を受けさせようとしていた」（父親・愛知 56.7%、母親・愛知 90.8%、父親・大邱 82.7%、母親・大邱 97.3%）「よい大学に行くことを望んでいた」（愛知・父親 61.3%、愛知・母親 82.9%、大邱・父親 70.7%、大邱・母親 89.1%）「将来の職業に対して大きな期待をしている」（愛知・父親 57.0%、愛知・母親 76.8%、大邱・父親 66.7%、大邱・母親 83.6%）において、両地域、父母いずれにおいても高い肯定的回答割合であった。地域別にみると多くの項目（父親 b～i、母親 a、c～i）で大邱のほうが愛知より「あてはまる」人の割合が多い傾向にある。父親と母親を比べると、いずれの地域でも母親のほうが「あてはまる」人が多いが、大邱データでは「できるだけ良い教育を受けさせようとしていた」（父親 90.8%、母親 97.3%）、「将来のためなら、どんな苦勞もしてくれた」（父親 93.0%、母親 98.1%）、「よい大学に行くことを望んでいた」（父親 82.9%、母親 89.1%）「将来の職業に対して大きな期待をしている」（父親 76.8%、母親 83.6%）「進路や就職に関しては、父・母親の希望や意見を重視する」（父親 54.1%、母親 61.9%）で、「あてはま

る」との回答割合が拮抗しており、大邱データでは母親だけでなく父親の教育期待も強く受けとめ、父親の希望・意見をも重視する傾向が読み取れる。愛知データで父親と母親の回答が拮抗しているのは「勉強を教えてもらったことがある」の項目である（父親 43.3%、母親 48.1%）。

これらの項目について地域ごとに性別クロス分析をしたところ、カイ二乗検定²⁾で有意な関連がみられたのは父親・愛知の「あなたの将来の職業に対して大きな期待をしている」で男子がより肯定的な傾向を示したこと(p<.05)、母親・愛知の「進路や就職に関して自分から話をしたり、相談をしたことがある」で女子がより肯定的な回答傾向を示したこと(p<.001)の二点のみであった。親の教育期待とそれに対する子どもの対応は、大邱データでは女子・男子の違いはみられず、愛知データでも「父親の職業期待は男子に、母親への話、相談は女子に」との違いのみであり、総じてみると親からの教育期待の性別による違いがみられない項目が大勢を占めている。

3.2 学校教育への態度と学歴意識

図2は、学校教育に対する大学生の態度を地域別に示したものである。「授業で出された宿題や課題をきちんとやっていた」に肯定的な回答を示した割合は愛知 76.3%、大邱 86.3%、「できる限りよい成績を取ろうとした」への肯定的回答の割合は愛知 75.1%、大邱 82.3%であり、両地域の対象者において学校教育に適応的だった人が大勢を占めている。「授業でわからないことは先生に質問した」に肯定的回答をした人の割合は愛知 63.4%、大邱 50.0%であり、愛知の対象者が13.4ポイント肯定的回答割合が高い。

これらの態度を各地域、性別にみると、「わからないことは先生に質問」は愛知において男子が(p<.05)、「宿題や課題をきちんとやっていた」(愛知 p<.01 大邱 p<.01)「できる限りよい成績」(愛知 p<.001 大邱 p<.05)は愛知、大邱双方で女子がより肯定的に回答する傾向がある。

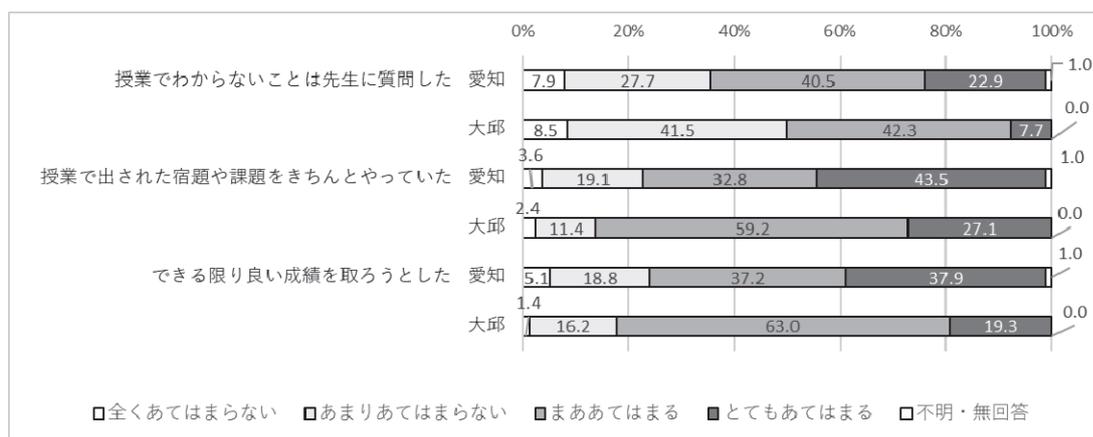


図2 学校教育に対する態度(愛知：n=393 大邱：n=414)

図3に「高い学歴をもつことは大切だと思う」に対する回答を地域、性別に示した。肯定的回答の割合は、両地域、男女とも7割～8割台と高い。愛知、大邱とも性別クロス分析で有意の関連がみられる。愛知は女子がより肯定する傾向(p<.01)、大邱は肯定する割合には大差はないが男

子で「とてもそう思う」がより多い傾向(p<.01)である。

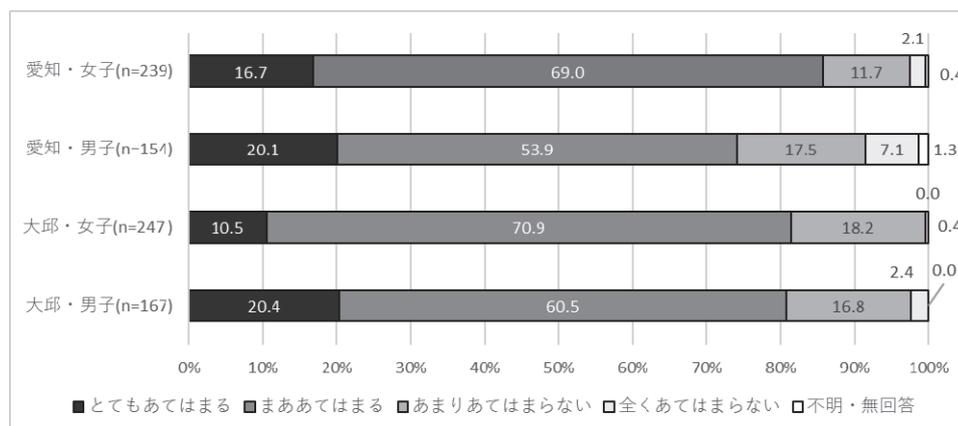


図3 学歴についての意識（「高い学歴をもつことは大切だと思う」）

「高い学歴をもつこと」が「大切だと思う」理由を表2に示した。愛知は「将来への可能性が広がるため」（女子 54.9%、男子 56.0%）に回答が集中し、次いで「就職活動に有利なため」（女子 15.0%、男子 22.4%）との回答が続く。大邱は「将来への可能性が広がるため」（女子 28.9%、男子 31.9%）、「時代が学歴社会であるため」（女子 28.9%、男子 31.1%）、「就職活動に有利なため」（22.4%、男子 18.5%）が男女ともに上位3位である。学歴は重要だが、仕事や将来の豊かな生活に直結するというよりは、「将来の可能性」拡大（愛知、大邱）、「時代が学歴社会」（大邱）という漠然とした理由が優位になる形で、学歴重視の意識は支えられている。

表2 「高い学歴をもつことは大切だと思う」理由

	愛知・女子 (n=116)	愛知・男子 (n=206)	大邱・女子 (n=201)	大邱・男子 (n=135)
就職活動に有利なため	15.0	22.4	22.4	18.5
親からの期待に応えるため	1.5	1.7	3.0	3.7
将来への可能性が広がるため	54.9	56.0	28.9	31.9
高学歴のパートナーを見つけるため	1.0	0.0	0.0	1.5
経済的に豊かな生活を送るため	10.7	4.3	5.5	4.4
自分のプライドを守るため	2.9	1.7	3.5	4.4
時代が学歴社会であるため	5.3	7.8	28.9	31.1
学びたいことを学ぶことが重要であるため	2.4	4.3	7.5	4.4
その他	0.0	0.0	0.5	0.0
不明・無回答	6.3	1.7	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

3.3 塾・習い事

塾に行った経験のある人は、愛知女子 80.3%、愛知男子 81.8%、大邱女子 95.5%、大邱男子 93.4%である。学校外の「私教育」を受ける経験は、対象者の大学生たちにとって「通常の」経

験であり、特に大邱においては「ほぼ皆が経験する」事柄である。塾に「自分の意志で行っていましたか」という問いに対して、「はい」と回答した人の割合は、愛知女子77.2%、愛知男子66.9%、大邱女子74.6%、大邱男子51.3%であり、両地域とも女子のほうが自分の意志で行っていた人が多い。(愛知 $p<.05$ 、大邱 $p<.001$)

行っていた習い事を複数回答であげてもらった結果を図4に示す。愛知で男女ともに半数以上の人を経験している習い事は「スポーツ関係」(女子61.5%、男子64.9%)、大邱で男女ともに半数以上が経験しているのは「英会話」(女子65.2%、男子65.3%)、「通信教育」(女子73.3%、男子66.5%)である。習い事に行くことも両地域ともに「通常の」経験である。上でみたように塾の経験では性差はみられないが、習い事では両地域ともにいくつかの項目で性差がみられる。愛知では「英会話」($p<.01$)「音楽関係」($p<.001$)「通信教育」($p<.001$)で女子がより経験する傾向がある。大邱では「音楽関係」($p<.01$)「絵画教室」($p<.01$)で女子がより経験する傾向がある。

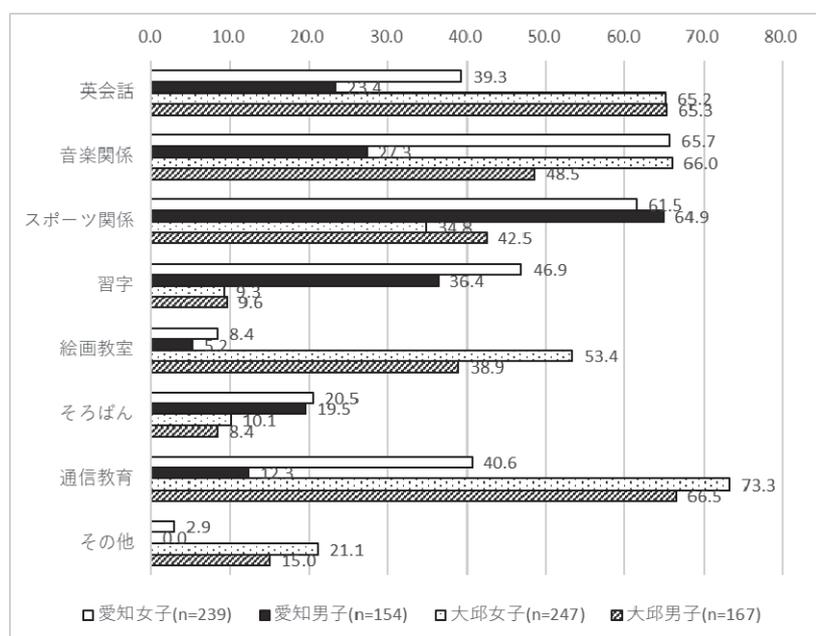


図4 行っていた習い事(複数回答)

4. パートナー関係と結婚

次にパートナー関係と結婚に関する項目への回答結果を読んでいくことにしよう。

4.1 交際、同棲経験

図5は、交際、恋人の有無、同棲経験など、親密なパートナー関係にかかわる経験をたずねた項目の地域、性別集計結果である。親密な関係性や繋がりの方を把握する意図で「シェアハウス」「友人として交際している異性」についてもたずねた。「交際経験がある」人の割合は両地域、男女とも8割前後である。「現在恋人がいる」人は両地域、男女とも4割前後であった。「同棲」「シェアハウス」では大邱男子で10.8%の対象者が経験ありと回答している。大邱男子は

徴兵、複数の高等教育機関に在籍する傾向などから年齢が高いことが人生経験の幅に影響を及ぼしていることが考えられる。「友人として交際している異性」は愛知女子で77.0%と高めである。

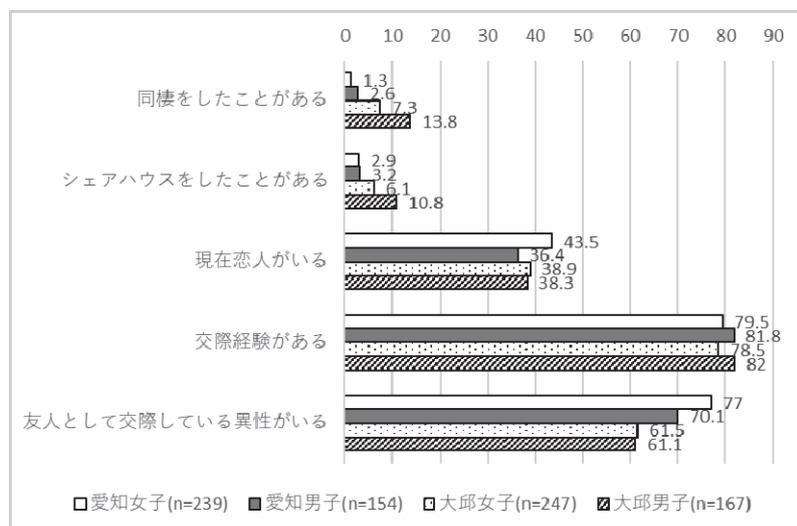


図5 交際、同棲経験

4.2 パートナー関係・結婚についての意向

図6は結婚、同棲、子どもをもつことへの意向の地域、性別集計結果である。「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合わせた値)

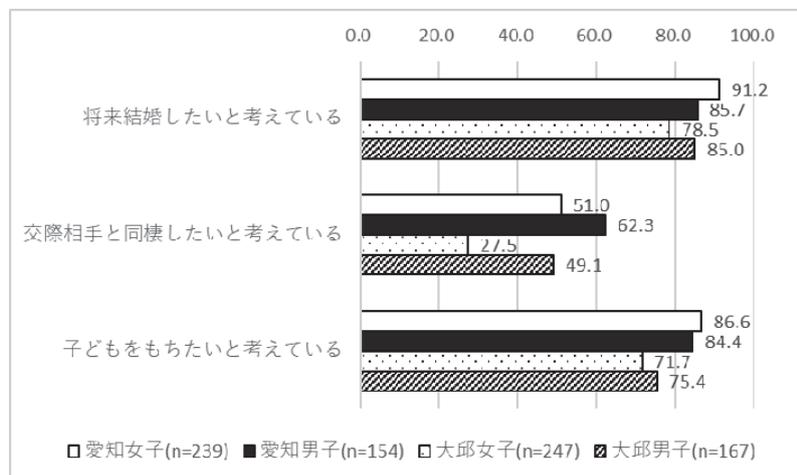


図6 結婚、同棲、子どもをもつことへの意向

「将来結婚したい」人の割合は、両地域、男女ともに高く、8割弱から9割強の人が「結婚したい」と回答している。結婚への意向を性別にみると、愛知では女子がより高く (p<.05)、大邱では男子がより高い (p<.05)。「子どもをもちたい」については愛知では男女とも8割台、大邱では男女ともに7割台が子どもをもつことへの意向を示している。地域・性別カテゴリーのなかで「子

どもをもちたい」意向が最も低いのは大邱女子である。これは結婚への意向と同様の傾向である。「交際相手と同棲したい」人の割合は愛知女子 51.0%、愛知男子 62.3%、大邱女子 27.5%、大邱男子 49.1%である。大邱において男女の違いが大きい ($p < .001$)。

図7に「将来結婚したいと考えている」に「とてもあてはまる」「まああてはまる」と答えた人の希望結婚年齢(満年齢)を示す。愛知は「25～29歳」に回答が集中し(女子 83.5%、男性 73.5%)、大邱男子は「30～34歳」に回答が集中(63.4%)、大邱女子は「25～29歳」(47.4%)と「30～34歳」(49.0%)に回答が二分される。

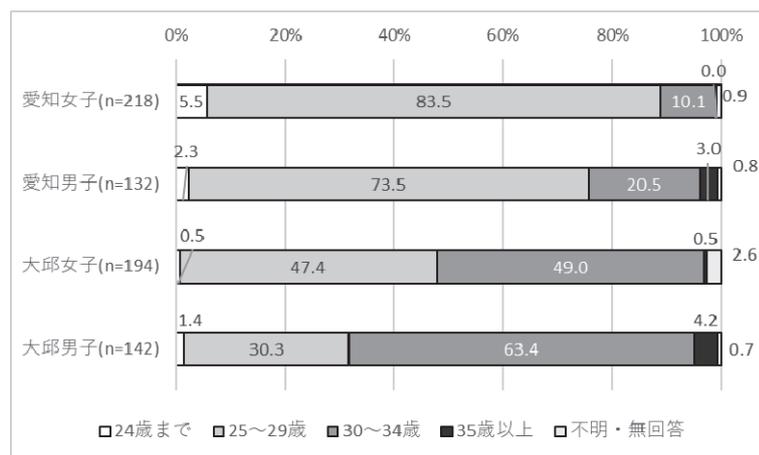


図7 結婚したい年齢

「将来結婚したいと考えている」回答の理由を複数回答でたずねた。「とてもあてはまる」「まああてはまる」と答えた人の理由を図8に示した。愛知は男女とも「家族をもちたい」が1位(女子 81.2%、男子 78.0%)、2位、3位に「好きな人と一緒に暮らしたい」(女子 61.0%、男子 3位 59.8%)、「子どもがほしい」(女子 75.2%、男子 2位 62.9%)が並ぶ。大邱は男女ともに1位「好きな人と一緒に暮らしたい」(女子 76.8%、男子 81.7%)、2位「家族をもちたい」(女子 59.3%、男子 54.9%)、3位は女子「子どもが産まれるならば結婚したほうがよい」(42.8%)、男子「社会的に認められたい」(33.8%)である。結婚によって生じる関係のなかで、愛知は「家族」がより優位に回答され、大邱はパートナー関係が優位に回答される傾向がみられる。

図9は「将来結婚したい」に「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」と回答した人に、その理由を複数回答であげてもらった結果である。両地域、男女ともに1位は「自分の時間がほしい」(愛知女子 66.7%、愛知男子 86.4%、大邱女子 56.6%、大邱男子 60.0%)である。それ以外で相対的に多くの人があげている項目は、愛知男子、大邱女子の「結婚生活が面倒」(愛知男子 45.5%、大邱女子 45.3%)、大邱男子の「お金がかかる」(48.0%)であった。

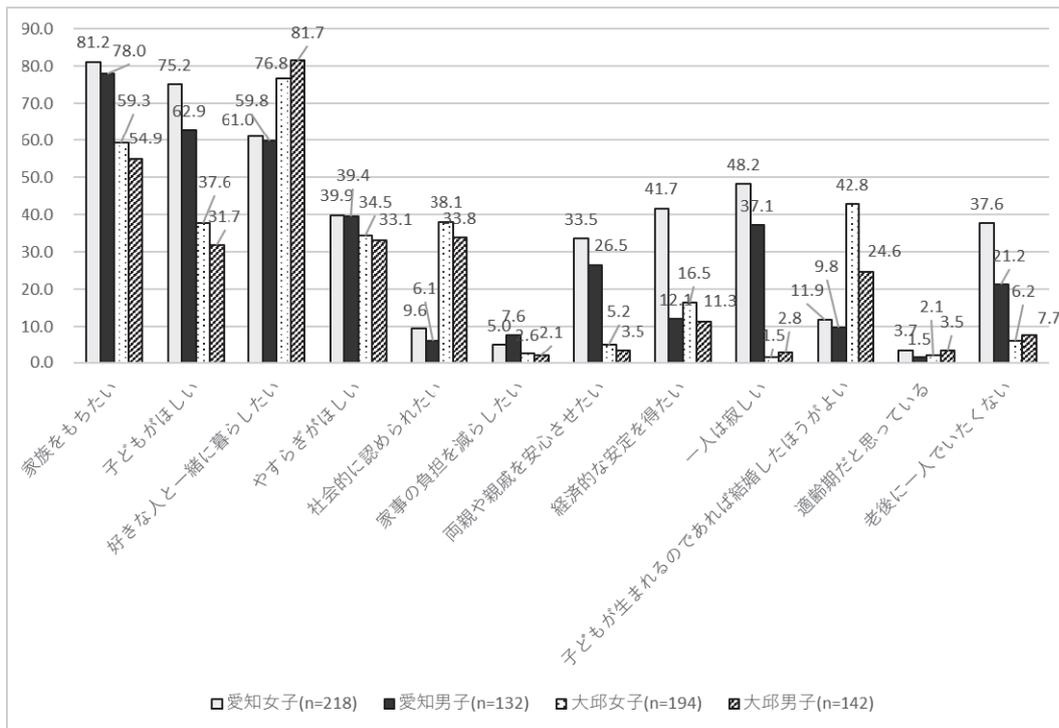


図8 「将来結婚したい」理由

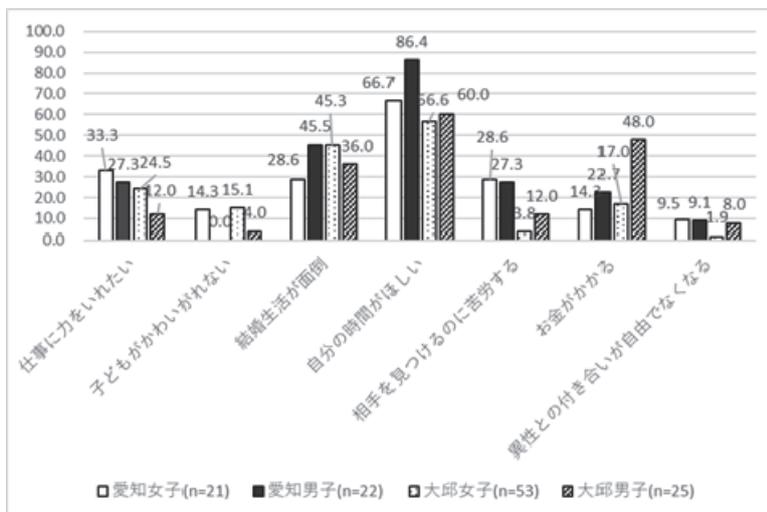


図9 「将来結婚したい」に「あてはまらない」理由

4.3 恋人、結婚相手に望むこと

「恋人に望むこと」「結婚相手に望むこと」を複数回答であげた結果を表3に示す。「恋人に望むこと」で上位にくるのは、愛知では「一緒にいて気を使わない」(女子 58.2%、男子 56.5%)、「物事の価値観が合う」(女子 58.2%、男子 51.9%)、「優しい」(女子 51.9%、男子 38.3%)、「恋愛感情」(男子 41.6%)である。大邱では「恋愛感情がある」が男女ともに1位(女子 64.7%、男子 59.1%)、女子では「優しい」(59.1%)、「容姿や身長が好み」(42.5%)、男子では「趣味が合う」(43.1%)、「連絡がマメである」(37.1%)が上位にくる。「結婚相手に望むこと」では、愛知は「物

事の価値観が合う」(女子 65.7、男子 57.8%)、「一緒にいて気を使わない」(女子 51.5%、男子 68.8%)が1、2位である。これは「恋人に望むこと」と同様の傾向である。愛知女子の同率2位である「年収・経済力」(51.5%)と愛知男子3位の「家事全般できる」(31.2%)は、「男は稼得、女は家事」の性別役割を反映した結果となっており、この点には「恋人」と「結婚相手」に求めるものの違いが現れている。大邱データでは「優しい」(女子 60.7%、男子 37.1%)が上位にくる点は「恋人」と「結婚相手」に求めるものの共通点である。大邱で男女ともに「浮気をしない」が上位にきており(女子 53.0%、男子 47.3%)、この点は大邱データにおいて「恋人」と「結婚相手」に求めるものが異なる。大邱女子において「年収・経済力」(50.6%)が上位にくるのは愛知女子と同様の傾向である。大邱男子に特徴的なのは「金銭感覚が合う」が一定割合(35.3%)選択されていることである。

表3 恋人、結婚相手に望むこと

	恋人に望むこと				結婚相手に望むこと			
	愛知女子 (n=239)	愛知男子 (n=154)	大邱女子 (n=247)	大邱男子 (n=167)	愛知女子 (n=239)	愛知男子 (n=154)	大邱女子 (n=247)	大邱男子 (n=167)
物事の価値観が合う	1位 58.2	2位 51.9	23.9	28.7	1位 65.7	2位 57.8	21.1	29.3
優しい	3位 51.9	38.3	2位 59.1	28.7	25.5	27.3	1位 60.7	2位 37.1
浮気をしない	16.3	13.0	19.0	29.9	19.7	20.1	2位 53.0	1位 47.3
趣味が合う	30.5	32.5	34.4	2位 43.1	6.7	11.7	10.9	28.1
行動力・決断力がある	10.9	9.1	8.9	7.8	10.4	17.2	17.8	23.4
子どもを産むことに前向き	0.4	0.6	0.4	0.6	7.9	9.7	2.8	5.4
恋愛感情がある	34.7	3位 41.6	1位 64.7	1位 59.1	9.2	11.7	8.1	18.6
年収・経済力	1.7	1.9	4.9	1.8	2位 51.5	6.5	3位 50.6	23.4
相手の親と同居しなくて良い	0.4	0.0	0.0	0.0	5.0	1.9	10.9	3.0
容姿や身長が好み	20.1	33.8	3位 42.5	36.5	4.6	9.1	4.0	12.6
家事全般できる	0.0	4.5	0.8	1.8	5.0	3位 31.2	28.7	21.0
仕事の内容・会社	0.0	0.0	0.4	0.6	2.1	2.6	2.4	1.2
金銭感覚が合う	8.8	6.5	6.5	10.2	24.3	19.5	22.7	3位 35.3
学歴	0.8	0.0	0.4	3.0	0.8	0.6	2.4	2.4
一緒にいて気を使わない	1位 58.2	1位 56.5	3.6	5.4	2位 51.5	1位 68.8	2.0	5.4
連絡がママである	4.6	2.6	36.4	3位 37.1	0.4	3.2	2.0	6.6

5. 結婚、家族に関する意識

図10は家族に関する意識の回答を地域、性別に「賛成」「どちらかといえば賛成」をあわせた割合を示したものである。結婚に関する意識を多面的にたずね、結婚と愛、子ども、個人の人生、婚姻制度などとの関わりについて意識の構造を把握しようとした。結婚と愛を結びつける意識(d、e)については大邱女性が低めの値ではあるが地域、男女ともに約6割以上の方が肯定的に回答しており、愛-結婚の結合はおおむね肯定的に捉えられていると考えられる。結婚と子どもの関係についてみると「結婚したら子どもをもつべき」については、大邱男子では76.0%が肯定、愛知女子・男子、大邱女子では5割台が肯定で賛否が分かれる。「結婚していなくても、子どもをもつことはかまわない」について肯定する割合は愛知では男女ともに4割程度、大邱では2割台と低い。結婚と同居の関係に関する項目「男女が一緒に暮らすなら結婚すべき」については愛知女子、

男子は5割台、大邱男子が6割強、大邱女子は4割強の人が賛成と、賛否が分かれる。結婚と婚姻制度の関係についての項目「事実婚はあってもよい」については、愛知は男女ともに8割前後、大邱は6割前後の人が肯定している。結婚と「個人としての人生」の関係をみると「人生には結婚相手や家族とは別の自分だけの目標を持つべき」には愛知女子・男子、大邱男子では8割台、大邱女子では9割台の人が肯定している。その一方で「家庭のためには自分の個性や生き方を半分犠牲にするのは当然」には愛知・大邱男子で6割台、愛知女子で4割強、大邱女子で5割強の人が賛成している。母親の子育て規範に関する項目(i)では、愛知女子は5割強、愛知男子、大邱女子・男子は4割強の人が肯定している。

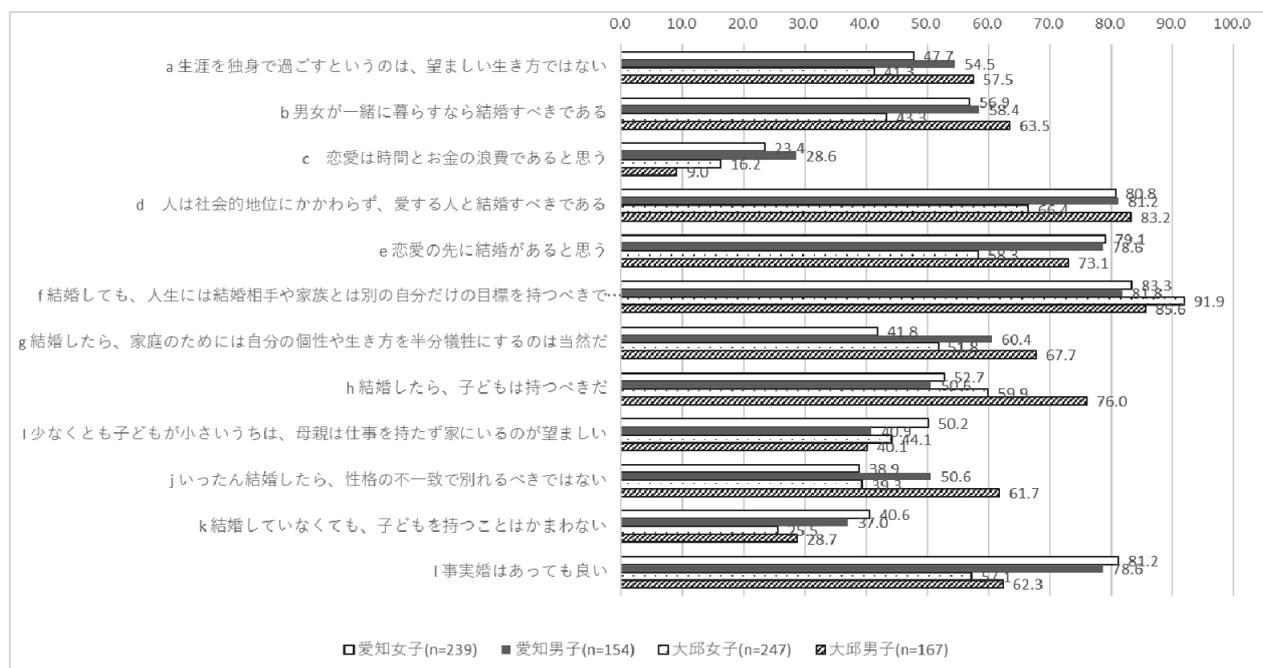


図 10 結婚、家族に関する意識

性別に注目すると、大邱では「生涯独身望ましい生き方ではない」(p<.001)、「一緒に暮らすなら結婚すべき」(p<.01)、「愛する人と結婚すべき」(p<.001)、「恋愛の先に結婚がある」(p<.01)、「結婚したら自分の個性や生き方を犠牲」(p<.05)、「結婚したら、子どもは持つべき」(p<.01)、「性格の不一致で別れるべきではない」(p<.001)の項目で有意な関連がみられた。愛知で有意な関連がみられたのは「恋愛は時間とお金の浪費」(p<.01)、「結婚したら自分の個性や生き方を犠牲」(p<.01)、「性格の不一致で別れるべきではない」(p<.01)の項目である。いずれも男子がより肯定的回答を示す傾向がある。

6. おわりに

日韓の地方都市圏で大学生対象に行った質問紙調査の教育・学歴および結婚・パートナー関係に関する基礎集計結果を、冒頭に述べた比較家族・ジェンダー論の観点をもって要約、考察する。

教育・学歴に関する項目の基礎集計結果の検討から見えてきたのは、両地域において子どもの

性別を問わず、親からの高い教育期待を受けていることである。両地域とも母親の教育期待を受け止めている割合がより多い傾向にはあるが、両地域の大学生たちは父親からの教育期待も相対的に強く受け止めており、特に大邱では母親、父親についての回答割合が拮抗する項目が多い。また両地域の回答者は男女ともに学校教育に適応してきた人が多く、学歴重視の意識をもつ人が多い。塾、習い事などの経験も両地域、男女ともに一般的である。両地域の対象者たちは、性別を問わず「教育する家族」のなかで育ち、学校教育と学歴重視意識に適応的な人が主流である。

このように教育、学歴に関する生活実態と意識では両地域ともに脱ジェンダー化はすすんでいるが、結婚・パートナー関係に関する意識については、パートナー関係の多様性支持と脱ジェンダー化は不徹底であり、そのあり方に地域、性別の相違がみられる。結婚意向、子どもをもつ意向を示す人は両地域、男女とも多数派を占める。結婚意向をもつ理由には地域による違いがみられ、愛知は家族をもつこと、大邱はパートナー関係にかかわる理由が優位になる。結婚、家族に関する意識には、意識次元による回答傾向の違いがみられる。両地域、男女ともに愛と結婚を結びつける意識は高く支持されている。事実婚を支持する割合も相対的に高い。非婚で子どもをもつことは、両地域、男女ともに肯定割合は低く、特に大邱で低い。結婚と「個人」の関係についての回答は両義的である。「結婚しても自分だけの目標を持つべき」には両地域、男女とも支持する人が主流だが、「家庭のためには自分の個性や生き方を半分犠牲にするのは当然」では賛否が分かれる。母親の子育て規範についても賛否が拮抗している。性別に注目すると、大邱、愛知ともに、男子がより規範拘束的な回答を示す傾向がみられる。

教育に関する社会化過程における脱ジェンダー化と、結婚・パートナー関係に関する意識面では脱ジェンダー化及び多様性への感覚が部分的にとどまっていることのギャップが、本稿の検討から見えてきたことである。今後、職業に関する意識もあわせ分析、考察を深めることが課題である。

註

- 1) 本調査報告は下記の学会報告をもとにしている。山根真理 2018「大学生のライフコースに関する意識調査—地域間比較の概観」日本家政学会家族関係学部会 第38回家族関係学セミナー
- 2) クロス分析でカイ二乗検定を行った有意水準である。図では「とても」「まあ」をまとめて「あてはまる」人の割合を示したが、クロス分析は4件法の選択肢で行った。以下のクロス分析結果についても同様。

参考文献

Chang Kyung-Sup, 2010 *South Korea under Compressed Modernity*, Routledge.

落合恵美子、2013「近代世界の転換と家族変動の論理—アジアとヨーロッパ」『社会学評論』Vo.,64 No.4: 533-552

鈴木萌加、2017『大学生への調査からみる現代の恋愛観・結婚観』愛知教育大学教員養成課程家庭選修卒業研究論文

渡邊奏子・加藤奈那子、2017『学力競争の中の若者』愛知教育大学教員養成課程家庭選修・専攻卒業研究論文